

## 謝辞

本日は私たち卒業生のために、このような厳粛かつ盛大な式典を催して頂き、誠にありがとうございます。また、御多忙にも関わらず、教職員の皆様・御来賓の方々のご臨席を賜り、卒業生一同心よりお礼申し上げます。

卒業という節目を迎える今、私たち卒業生の胸には、ここまで自らが置かれていた境遇、待ち受ける未来への思いが過ぎります。

私は、1995年8月18日にこの世に生を受けました。体重は1600グラムととても小さな体でした。きっと、母も父もその命を喜んでくれたのではないかと思います。しかし、私が生まれてからすぐに父は不慮の事故で亡くなりました。そこから心を病んでしまった母の元から離れ、小学生になるまで私は施設で育ちました。幼稚園の卒園式に母が迎えに来てくれた日のこと、施設からアパートに引っ越す車中での会話、今でも鮮明に覚えています。それから私が小学生の間、母は職を転々とし、職を変える度に私たちは引越しをしました。母が家の物を段ボールに片付け始める度に自分も新しい場所へと連れていってもらえるのか、置いていかれはしないだろうかと夜も眠れずに心配していました。決して裕福な家庭ではなかったけれど、私は、朝起きれば隣に母がいる家、母が毎日帰ってくる家、それだけでとても幸せでした。

そして、私が中学生になった時に私の人生は大きく変わりました。それは、私が教員を目指すきっかけとなった恩師との出会い、親友と呼べる友人達との出会い、情熱を注ぎこめる陸上競技というスポーツとの出会い、中学校の3年間は幸せそのものでした。しかし、それは長くは続きませんでした。高校入学後、母の助けに少しはなるかと思い、早朝に仕分けのアルバイトをしてから高校へと向かい、放課後も飲食店でアルバイトを毎日していました。しかし、陸上競技もなんとか続けたいと考え、アルバイトがない日や隙間時間を見つけ部活に参加していました。アルバイトばかりの高校生活だったからか、友達も出来ず、部活では顧問や先輩から「遊ぶ金欲しさに部活に来ないクズ」と呼ばれ無視をされ悔しい思いもしましたが、それでも学校に行き、部活に参加し続けました。私は私にできることを精一杯頑張っていたと思います。

ところが、母の母、私の祖母の死をきっかけに母は橋から身を投げる決断をしました。幸いにも一命は取り留めましたが、駆けつけた病院で母に言われた言葉が今でも頭から離れません。「大空と毎日一緒にいるのが辛くて辛くてしょうがない。顔も仕草も声も、日に日にパパそっくりになってくる。忘れたくても忘れられない。」そう言われた私は、どんな顔をして、どんな言葉を返したらいいのかかわからずに笑顔で「そっか。」と答えるのが精一杯でした。その日だけ、初めて家族のことで1人涙を流しました。それからは、後遺症で足を引きずりながら病院へ通う母を見て、自分にできることは何かと探し続けました。そのため、部活を辞めてアルバイトの日数を増やし、修学旅行にはお金がかかるからと参加せず、少しでもお金を稼いで、母の負担を減らすことだけを考えていました。しかし、その時すでに、「保健体育の教員になりたい」という明確な夢が自分の中で芽生えていました。仕事に就くことが出来ない母を支えるために経済的にも家庭的にも全日制の大学に通うことは難しく、その夢を諦めていましたが、一生今の自分のままでも良いのだろうかと思問する日々でした。

その後、星槎大学に進学することを決意したのは、今の自分からより良い自分になりたいというほんの少しの向上心でした。

そして、そこから始まった学生生活は簡単なものではありませんでした。

星槎大学での学生生活は、仕事を終えた後、1人で教科書を読み、机に向かう日々でした。休みの日には図書館へと足を運び、開館から閉館まで勉強をして過ごしたことも多々ありました。年に一度のみ開催されるスクーリングに参加するため、成人式にもいくことも諦めました。同年代の友人たちが全日制の大学に通い、毎日楽しそうに勉強をしている姿や、部活動に励む姿をみて、言葉に表せないような寂しさを感じ、自分を卑下していたこともあります。

しかし、私は気付いたのです。星槎大学がなければ私は保健体育の教員となる夢を目指すことができず、学ぶ機会すら得ることができなかつた。そのことに気が付くと、星槎大学があることに感謝しなければならぬと思えるようになりました。もし、星槎大学で仕事をしながら、学士資格と保健体育の教員免許状取得を目指すことができなかつたら夢を諦めていたかも知れません。そう思えるようになると、星槎大学の設置や、スポーツ身体表現専攻の設置に尽力してくれてくれた方々に、感謝の気持ちが生まれました。そして、私に様々な経験や知識を教授してくれる先生方がいてくれること、年齢や立場は違えど共に勉強する仲間がいてくれること、その全てが幸せなことであると気づき、さらに感謝の気持ちが生まれました。つまり、私の中で「感謝の連鎖」が生まれたのです。私の中で「感謝の連鎖」が生まれたのも、星槎大学の学びの中で「人を認める、人を排除しない、仲間を作る」という理念で形作られた人と人との輪の中に包まれていたからだと思います。その時から、星槎大学はただ孤独に勉強をする場所から、同じ夢を追う仲間と出会える自分の居場所へと変わっていきま

そして今、卒業の日を迎えています。今日、この日だけは自分で自分を褒めさせてください。それは、「卒業という結果を手に入れた自分に」ではありません。前を向くことすら辛い時期に、傷つきながらも、ほんの少しの向上心を持ち、勇気をふりしぼり、星槎大学へと小さな小さな一歩を踏み出した自分をです。

私たち卒業生一同は、星槎大学での学びを糧に、これから先の未来にも、人と人が手を取り、支え合い、微笑み合えるような共生社会の構築に尽力するとともに、必ず幸せな自分になることを約束いたします。

最後になりますが、星槎大学が私の背中を強く強く押してくれました。そんな、星槎大学を作り上げてくれている諸先生方、事務局の方々、同じ夢を追う仲間の皆さんに心より感謝するとともに、卒業生代表としてこの場を借りて御礼申し上げます。そして、星槎大学のさらなる発展と、御臨席の皆様のご健勝と益々の御活躍を祈願し、謝辞とさせていただきます。

平成 31 年 3 月 16 日

佐々木 大空